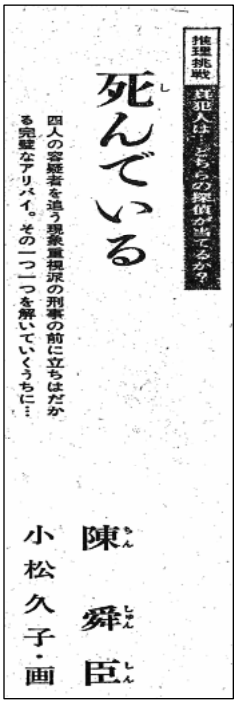
陳舜臣さんを語る会通信

NO.122　Jun.　2024

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2024年6月20日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

短編集未収録27作を順次紹介いたします/第6回4作、その1「死んでいる」

短編集未収録27作を順次、詳しく紹介しています。本号はその第６回です。前号に続き、初出年の古い順で４作取り上げました。　（編集委員　橘雄三）



「死んでいる」は『別冊小説宝石』一九七一年新春特大号掲載。挿し絵が二つ入って十ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

［舞台・作中時間］

被害者が出席するはずだったゴルフ仲間の新年会の会場が都下のカントリークラブだったり、登場人物に銀座のバーのマダムが居たりするので舞台は東京。月刊誌の一九七一年新春特大号掲載なので、作中時間もその頃か。

［登場人物］

●**雲谷日出夫**　幼稚園から大学までぜんぶ揃った雲谷学園の理事長。
●**雲谷節子**　日出夫の妻。
●**雲谷映子**　20歳。雲谷日出夫の娘。雲谷学園短期大学家政学部二年生。
●**松野一太郎**　40歳、雲谷家の主治医。
●**影山美男**　雲谷学園大学文学部三年生。学生運動のリーダーだった。
●**上田清江**　銀座のバーのマダム。雲谷日出夫の愛人。雲谷夫人の節子にも知れている。
●**小野川**　刑事。
●**私**　刑事。

［あらすじ］

ゴルフ仲間の新年会を欠席した雲谷日出夫が自宅タンスの中から死体で発見される。

小野川と私、二人の刑事を中心に捜査は進む。

役者は揃ったようである。われわれはこの役者たちを吟味することになった。

更年期をすぎて、カサカサになったヒステリー夫人。気の強い、動物的闘争本能をもった水商売十年選手。情熱的で、とことんまでやり抜くという、自尊心の強い医師。栄光の座から転落した、ひとりよがりのナルシスト。――四人とも、雲谷日出夫を殺す動機らしいものはもっている。

右の記述、少し補足をしておこう。

まず、影山美男について。影山は全学ゲバ学生のシンボル的人物だったのだが、雲谷日出夫は、学園ストにおける団交の席で、全学生を前にして、

――影山君は二こと目には、体制打倒、ブルジョア意識を追放せよと叫ぶが、体制のなかにいるブルジョアである私の娘とつき合い、プロポーズしたことも…。

と、言い放った。このとき以来、影山は仲間から総スカンを食いリーダシップを失った。

もう一人、医師の松野について、捜査主任と私の会話。

「医者というのは死体の発見者だったな？」
「はい、そうです。雲谷家の近くに住んでいる医師で、映子と結婚させてくれと、やかましく言っているときいております。映子は二十歳ですから、年齢は倍なんですが」
「四十か。…まだ独身かね？」
「いえ、細君はいるんですが、それとは近く別れるからと…」
「うーむ、ちょっと非常識だね」
「雲谷日出夫にこっぴどくはねつけられたらしいんです」

小野川刑事は女性二人を容疑者の上位に置き、私は男性二人の嫌疑を主張するが…。果たして犯人は…。

容疑者四人のうちの二人、雲谷夫人（左）と上田清江

短編集未収録作品紹介/第6回4作、その2「ありえない関係」

ありえない関係

陳舜臣

三芳悌吉画

「ありえない関係」は『オール讀物』の一九七一年4月号に掲載されました。挿し絵が三つ入って、十八ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

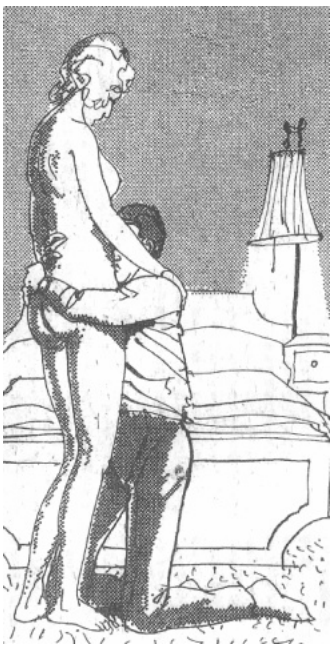
［舞台・作中時間］

曾根崎の小料理屋、大阪のミナミとか、京都駅前とかも出てきますが主な舞台は神戸です。月刊誌の一九七一年4月号に掲載されました。作中時間もその頃？　回想場面も多い。

［登場人物］

●私　33、34歳。課長昇進の声のかかるセールスマン。愛人ハニーに入れ込む。ジョニーとは古くからの知合い。

●ジョニー　25歳？本名、ドーミトリー。在留ロシア人の両親の間に生れた。父親は既に死亡。ケーキ職人の経歴があるが、怠け者で仕事が続かず。三年前から、京都駅前、大阪のミナミなどで、この絵のようないかさま募金で日銭を稼いでいる。



●ハニー　私の愛人。十以上歳上。私はハニーにマンションまで買い与えている。

●ジョニーのママ　ジョニーのいかさま募金の考案者。アイディア料として、毎日の稼ぎから五千円を取っている。

●古市　父親がアメリカ人で母親は日本人。帰化して日本籍を取っている老人。もとの名はフレンチ。私とは、道で会えば会釈するていどの知合い。日本と外国の橋渡しを自らの天職と考えている。

［あらすじ］

ある晩、ジョニーはママを殺してしまった。凶器はジャック・ナイフだった。

ジョニーのママは、浴室から出たところを心臓を刺された。ジョニーは立ち去るとき、バスタオルを母親の腰に巻きつけた。…。

それからしばらくして、私は古市という混血の老人の訪問を受けた。

老人の訪問の用件は、ジョニーことドーミトリーの『減刑嘆願書』に署名してほしいということだった。

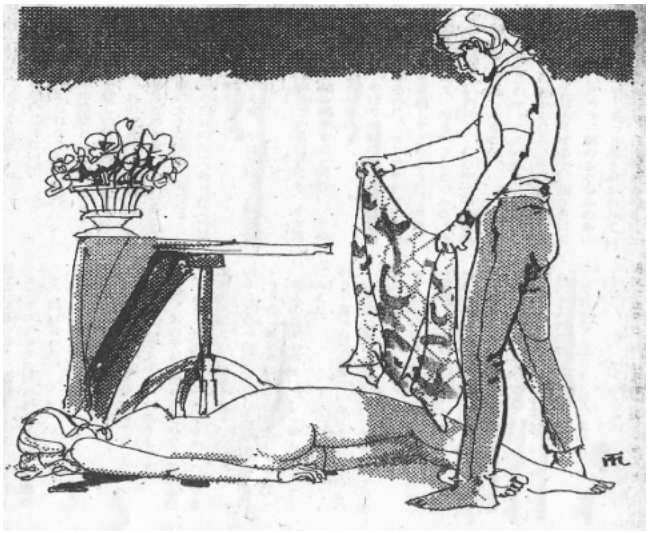
私は、古市老人から、ジョニーのママは養母であって、実母は、アメリカへ行ってしまったと聞かされる。そしてジョニーとママとの関係についても。

「あの女、…そう、ドーミトリーのママですが、彼女、あろうことかあの子に、けしからん振舞いに及ぼうとしたんですね。おまえは実の子じゃないから、かまわないんだと。…ドーミトリーはびっくり仰天したけれど、それでも信じられずに、私のところへ確かめに来たんです。…私ならなんでも知っていると思ったんでしょうね」

更に、古市は、自分とジョニーのママとのことについても明かす。

タイトルどおり、なんともありえない関係が次々明らかになる。

一つ、読んでいて読み落としたのか、いつのまにか、ハニーとジョニーのママが同一人物だということが自明のこととして筋が進む。



短編集未収録作品紹介/第6回4作、その3「キレモノ・ニセモノ」

「キレモノ・ニセモノ」は『別冊小説宝石』の一九七一年初夏号に掲載されました。挿し絵が二つ入って、十六ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

［舞台・作中時間］

舞台は東京。有楽町、丸の内、銀座などの地名が出てきます　掲載誌の発行が一九七一年初夏なので、作中時間もその頃か。

［登場人物］

●原喜美子　スター電機秘書課員。青木課長の腹心。

●和久秀男　30歳そこそこ。弱電業界のトップを走るスター電機を追う島田電器の企画室勤務。

●三島登　弱電トップのスター電機社長。

●野口啓三　スター電機取締役兼営業部長。社内の派閥のバランスのうえにのっかって、いまの地位を得たといわれている。

●細野健吉　スター電機営業部次長。スター電機の大スターといわれるキレモノ。

●青木裕　スター電機秘書課長。

●田沢誠　定年後、嘱託の守衛として働いている。

●平坂律子　秘書課員。野口啓三と特別な関係。

●平坂律子の従兄　「怪しい人物」

●大垣　スター電機を追う太陽電機の資材第二課長。青木の大学時代からの友人。

［あらすじ］

冷蔵庫、洗濯機などの弱電業界は、トップを走るスター電機を島田電器と太陽電器が追うという態勢にあった。

ストーリーは、有楽町の喫茶店で、ライバル会社の社員である和久秀男と原喜美子が話し合っているところから始まる。

「きみ、うしろめたくない？」

「ちょっぴりね」

「でも、お宅の社長さんのおっしゃったこと、ほんとうなのね？」

「ほんとうだとも。三百万円はけっして高いとは思わないそうだ」

「ぜんぶあたしがいただいていいの？」

などと、物騒な会話が続いている。

話は、スター電機内部の出来事に変わる。タイトル脇のキャッチコピー、**「産業スパイは一体誰か―東南アジア市場でニセモノ製品に悩まされるスター電機、その罠にかかった男の正体は…」**のように、スター電機内の不祥事として筋は進む。

営業部長の野口は、仕事上の難問は金で解決してきたような人物。それだけに、金を必要とした。

心にスキがあったというよりは、心が全面的に傾斜していたというべきであろう。野口は友人を介して知り合った香港のメーカーに仕事に協力してほしいと口説かれて、それを承諾してしまった。仕事というのは、ニセモノづくりである。

産業スパイは一体誰か？

野口に疑惑の眼をむけている人物がいた。それは社長のお庭番的存在である、秘書課長の青木であった。

青木の相棒は秘書課員の原喜美子であった。

（すこし危なくなってきたぞ）

と、野口も警戒し、目をそらす作戦を実行する。この作戦を立案・実行したのは野口、秘書課の平坂と平坂の従兄で、犠牲者は嘱託守衛の田沢であった。

産業スパイ問題が解決しそうになったとき、他の二社を巻きこんでの人材引き抜きへと進展し、冒頭の三百万円の話に繋がっていく。

上の挿し絵、左の人物は、実行犯の一人というより、むしろ犠牲者の嘱託守衛の田沢

短編集未収録作品紹介/第6回4作、その4「破局は穴の中」

破局は穴のなか

陳舜臣

下高原健二画

「破局は穴のなか」は『小説現代』の一九七二年10月号に掲載されました。挿し絵が三つ入って二十ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

［舞台・作中時間］

舞台は神戸。掲載誌の発行が一九七二年10月なので、作中時間もその頃か。

［登場人物］

●細川尚太郎　兵庫県警警部補。

●高村宗男　T銀行の現金輸送を請負う運送店の運転手。高校を出てすぐに入社、社員歴十年。

●正木勝　現金輸送車の運搬員。高村と同い年だが、社歴は四ヶ月。

●深川悦子　スナック『ようこそ』の店員。高村宗男とは顔なじみ。

●大西綾子　悦子の友人。細川警部補の恋人。

［あらすじ］

T銀行三宮支店を舞台に、現金輸送の運搬員による三千五百万円持ち逃げ事件が発生する。

事情聴取は、兵庫県警の細川警部補が担当した。結果、次のことが明らかになった。

アルミ・ケースをさげた正木に気づいた行員はいたが、特に違和感はなかったという。

正木は、銀行では顔なじみになっていた。

―ホクロさん。

と、銀行の人は呼んでいた。

鼻のあたまに大きなホクロがあり、右目の下にも、かなり目立つホクロのある男なのだ。ふとい縁の眼鏡をかけて、なるべくそのホクロが目立たないように工夫したつもりらしい。（左上の挿し絵）

現金輸送車の運転手高村は、顔なじみの深川悦子が友人と一緒に通りかかり、運転席からしばらく話をしていたので、正木の帰りが遅いことに気づくのが遅れたという。

深川悦子が一緒だった友人というのは、細川の恋人大西綾子で、細川警部補は驚き戸惑う。

九月はじめの事件が、正木勝が偽名だと分かった以外、翌年の七月上旬まで、ほとんど進展はなかった。

ところが、梅雨明け直前、全く偶然なことから、事件は大きく進展する。

裏六甲の大池の近く、戦時中に掘られた横穴防空壕の一つから、盗まれた三千五百万円が、封も破られていないアルミ・ケースに入ったまま発見された。

雨のシーズン、土砂が道路に崩れ落ちていた。現場に来合わせた土地の駐在巡査が、削り取られた山肌に、妙な物がつき出ているのに気づいた。アルミ・ケースであった。**（左の挿し絵）**

細川警部補が事情聴取した内に共犯者がいた。さて…。